

## 胡傑監督『星火』初探

土屋 昌明

2015年3月12日と13日に、本研究所のグループ研究「方法としてのドキュメンタリーの生成とアジアにおける発展」が、胡傑監督のドキュメンタリー『星火』の上映・討論をおこなった。本稿はそれをふまえて、この作品に対して初歩的な探索を加える。

胡傑監督は1958年4月生まれ、山東の人である。現在まで30篇ほどのドキュメンタリーを作っているが、そのすべてが中国当局の映画検閲を受けていないインディペンデント映画（中国語「独立电影」）である。『星火』は2013年の制作で、2014年8月に北京の栗憲庭電影基金の第11回北京インディペンデント映画祭（中国語「第十一届北京独立影像展」）で初上映が計画されていた。日本の新聞でも報道されたように、この映画祭は当局によって中止におこまれた。この映画祭のトリで上映予定されていたのが本映画である。その後、同映画祭の審査員は、2014年12月31日に胡傑監督『星火』に対して「独立精神賞」を出した（審査員は郭力昕・吳文光・楊荔鈞）。おそらく中国ではまだ公開上映されていないが、一部の愛好者の間では鑑賞されているらしく、インターネット上には感想や意見が出ている。また、インターネット上の掲出によると、2014年4月3日に香港中文大学で、10月12・16・19日に台北の第九回「台灣國際紀錄片影展」で上映されたようである。台湾ではアジアパースペクティブコンペ優等賞（中国語「亞洲視野競賽優等賞」）・華人ドキュメンタリー賞審査委員特別賞（中国語「華人紀錄片獎評審團特別獎」）をとっている。また、パリの現代中国研究センター（Centre d'études françaises sur la Chine contemporaine）主催による討論会「毛沢東時代の民間記憶とその歴史的衝撃」（Popular Memory of the Mao Era and its Impact on History）でも2014年12月15日に上映された。そのあと、ベルリンなどでも上映され、好評を博したよしである。日本では、本研究所グループ研究の上映が初であった。

本作は、1960年中国甘肅省で発生した、知識人による反体制地下活動に対する政権の弾圧事件を扱ったドキュメンタリーである。作中のインタビューによれば、この事件に関連した人物は200人にのぼるといわれ、40名あまりが罪を問われた。中心人物の張春元は無期懲役の判決のあと死刑に、もう一人の杜映華は懲役5年のあと死刑になった。この事件は中国でタブー視されているらしく、関係の資料や本格的な研究はあまり公開されてこなかった。日本の中国現代史研究でもほとんど注意されていないようである<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 銭理群『毛沢東と中国』第3章で林昭について、また第7章でこの事件について詳しく論じている。阿部幹雄ほか訳、青土社、2012年、上巻414頁以下。

歴史事件を映像によって検討した映像歴史学の作品として本作をみた場合、その基本的な重要性は次の三点であろう。第一に、インタビューに答える登場人物の多くが、この事件の当事者であり、このインタビューそのものが貴重な歴史証言となっていること。第二に、事件の起こった現地を直接撮影しており、この事件の現場環境を理解させる映像ともなっていること。第三に、画面に映し出される地下刊行物「星火」<sup>2</sup>の映像およびその文章は、従来、存在すら知られていなかったものであり、非常に貴重な資料であること。以下、紙幅の関係で、このうち第一点と第三点をふまえて、胡傑監督の作品に描かれている「星火事件」の特徴について論述したい。

## 星火事件の概要

本作にもとづいて、「星火」という地下刊行物出版に関する事件（「星火事件」）を素描しておこう。

1956年4月25日、毛沢東は中国共産党中央政治局拡大会議で「百花齊放、百家争鳴」の方針を打ち出し、大衆が共産党に対して意見・批判を出す「大鳴大放」をよびかけた。これに答える形で、全国で共産党中央に対する意見が出された。これに対して毛沢東は、1957年6月に「力を結集して右派分子の侵攻に反撃することに関する指示」を党内に伝達し、『人民日報』に社説「これはどうしてか？」（毛沢東が執筆）を発表した。これを境に、共産党へ意見・批判を出していた者を「右派分子」として摘発し、大衆による批判大会を開いて打ちのめした。

本作に登場する人物はみな、この時に「右派分子」として批判され、農村に下放させられた者である。彼らの多くが甘肅省の蘭州大学の教員や学生であった。その後、農村では大飢饉が進行し、多くの餓死者が出た。彼らはこの状況を目撃するうちに、意見交換のために現状認識について書いた論文を執筆し、それを「星火」という名の印刷物として刊行した。これは、現代の日本で言えば「研究会」であり、「会誌」であるが、任意団体の設置と自主印刷物の刊行配布が認められていない当時の中国では、反体制的な地下組織と地下出版物に他ならず、関係者は逮捕・懲役刑となった。以上の事情を軸に、本作にみえる他の関連事項を加えて時系列に整理すると、次のようになる。

1956年4月25日 毛沢東が「百花齊放・百家争鳴」を指示。

<sup>2</sup>「星火」という誌名は、毛沢東が1930年1月5日に林彪宛てに出した「時局估量和红军行动问题」において、農村から都市を包囲する戦法を説いたときに、「星星之火，可以燎原」という言葉を使ったのにもとづく。小さな火が広がって広野を焼き尽くすように、造反の火の手が広がって革命になるという意。張春元らは、毛沢東の言葉を自分たちの刊行物の名称に使うことで共産党批判をした点に注意すべきであろう。

- 1957年2月27日 毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」。
- 1957年5月1日 中共中央「整風運動に関する指示」が『人民日報』に登載。
- 1957年5月19日 北京大学で学生の民主化運動、雑誌『広場』を発刊。
- 1957年6月8日 毛沢東「力を結集して右派分子の気ちがいじみた攻撃に反撃を加えよう」、反右派運動。

この後、蘭州大学の教員と学生が批判されて農村に下放される。

- 1958年5月5～23日 中共第8回党大会第2回会議。大躍進を肯定、毛沢東が社会主義総路線を提示、10月までに人民公社化が全国で実現（「三面紅旗」）。
- 1959年5月 張春元・顧雁・胡曉愚・孫和が天水の馬跑泉公社で地下組織の結成を相談、農民暴動あるいは政変の惹起の可能性を話し合う。顧雁が刊行物『星火』を提案。
- 1959年10月 向承鑑が華北に出張、各地で餓死者を目撃、兄と議論。
- 1960年1月 『星火』第1号が出来。
- 1960年2月 鄧得銀が四川の餓死者の悲惨な状況を星火メンバーに知らせる。
- 1960年3月 このころ武山県だけで1万人以上の餓死者が出ていると杜映華らが認識。
- 1960年4月 張春元・苗慶久が上海南匯瓦硝公社黒橋の顧雁のところに集まり、『星火』を中共の最高指導層に発送することを議す。また張春元の「論人民公社」が出来たら、印刷して全国の公社書記以上の幹部に配布することを議す。
- 1960年8月 張春元が向承鑑に電話し、暗号でメンバーの検挙が始まったことを伝える。
- 1960年9月30日 向承鑑・杜映華ら武山のメンバーが一斉検挙される。
- 1961年9月6日 張春元が逮捕される。

彼らがどのようなプロセスで右派とされたか、蘭州大学の状況について、本作では取り上げていない。この点について、本作の外部の資料を少し見ておこう。

注意すべき人物として、彼らを統括する立場にある蘭州大学の副学長だった陳偉時がいる。彼は、戦前にミシガン大学に留学して帰国した化学者であり、相当に激しく党批判をしていたようである。共産党側の資料によれば、彼は1957年5月に「高等教育がわからない人間に高等教育学校（大学）をやらせて、どうして学校をうまくやれるだろうか？こういう状況なら、高等教育学校の党委員制を取り消すべきだ」と意見している<sup>3</sup>。このため、反右派闘争が始まる

---

<sup>3</sup>『高等学校右派言論選編』中共中国人民大学委員会、1958年8月（宋榮毅主編『中国反右運動数拠庫』香港中文大学中国研究服務中心、2010年）。

と厳しく批判され、甘肅の西の果てにある夾辺溝の農場で労働教養の処分を受けた<sup>4</sup>。彼と「星火」のメンバーとの関わりは不詳であるが、立場的に影響力が強かったと想定される。また、「星火」の主要メンバーの一人、胡曉愚は化学の専攻で蘭州大学の教員をしていたのであり、胡曉愚は向承鑑の先生であった。

この他、メディアにおいては、蘭州の主要新聞である『甘肅日報』で、幹部を批判する雑文が発表されていた<sup>5</sup>。例えば『甘肅日報』記者の王景超の雑文がそうである。王景超は反右派で批判され、陳偉時と同じく夾辺溝に遣られた後、そこで死亡した。このような共産党批判の高潮があった中で、本作の登場人物らも右派とされて農村に遣られたのである。

### 本作からうかがえる同時代へのまなざしと「星火事件」

しかし、「星火事件」の主要メンバーの一人である向承鑑へのインタビューによれば、彼は出張で北京ほかの華北の地で途中下車ができたし、居住していた工場には管理者はいなかったという。同じく主要メンバーの一人である譚蟬雪は、本作と一連のインタビューで、「農村の現状を見て自分たちは真の右派になった」と述べている<sup>6</sup>。つまり、右派分子に認定されたのは、微罪あるいは冤罪だったという認識である。また、向承鑑によれば、農村の自室には書架いっぱい、書物を持参したという。このように本作では、彼らの右派認定の詳細はわからないものの、それは彼らの人生を自暴自棄にさせるほど深刻な性質ではなかったこと、したがって右派にされたことが「星火事件」の直接の要因ではなかったことが示されているのである。

この事件の直接の動因は、当時の農村に蔓延していた大飢饉に対する危機意識であった。この大飢饉が我々の想像を絶するほど悲惨なものであったことは、1980年代になって人口統計が公表されたことで初めて世界に知られたのであった<sup>7</sup>。胡傑監督は、星火のメンバーの大飢饉の認識について詳しく採り上げている。それによれば、彼らの認識は次のように深まっていったようである。

まず、死者が出るのは病気ではなく餓死が原因である。それは大躍進の目標を達成するために、人民公社の食糧が少なくなったためである。譚蟬雪は次のように述べている。

<sup>4</sup> 高爾泰『尋找家園』広州、花城出版社、2004年。高爾泰も夾辺溝での労働経験がある。

<sup>5</sup> 和鳳鳴『経歴—我的1957年』敦煌出版社、2003年修訂版を参照。また、和鳳鳴へのインタビューをまとめた王兵監督のドキュメンタリー『鳳鳴—中国の記憶』シネマクガフィン（発売）、2013年。

<sup>6</sup> 胡傑監督のドキュメンタリー『林昭の魂を探して』に採られている。

<sup>7</sup> Jasper Becker, *Hungry ghosts: China's secret famine*, Holt Paperbacks, 1998 (ジャスパー・ベッカー『餓鬼 (ハングリー・ゴースト): 秘密にされた毛沢東中国の飢饉』川勝貴美訳、中央公論新社、2012年)。楊繼繩『墓碑: 中国六十年代大饑荒紀実』(第5版、修訂版) 香港、天地圖書、2008年 (『毛沢東大躍進秘録』伊藤正・田口佐紀子・多田麻美訳、東京、文藝春秋、2012年)。本書では、個別の地域の具体的状況について、档案資料とオーラル・ヒストリーを駆使して叙述されている。

「私に対して刺激が大きかったのは、私がやっかいになった一家のことだ。子供たちは出ていって老夫婦が残されていた。ある晩、急に泣き声が出て、見に行くと旦那さんが死んでいた。ピンとまっすぐに寝たままだった。彼はいつも私によくしてくれ、気をつけなさいなといつも言っていた。だからその時、私は彼が亡くなったのを見て、奥さんもひどく泣いて、強烈に打ちのめされた。当時は共同食堂での食事で、彼は食べ物を持ち帰って、なるべく奥さんに分けていた。だから自分の分が少なくなった。こうして栄養不足になったのだ。はっきりわかった、これは餓死だと。」

当初は、餓死者が出るのは、自分たちの地域の現象だと考えていた。それゆえ行政や党中央は餓死者が出ていることを認識していないと思われた。向承鑑は次のように述べている。

「武山駅から村まで5キロをこの鉄道沿いに歩いた。行く先で土手に死人がころがっていた。私は非常に驚いて、村に戻ると、党中央に上書しようと思った。現場のこうした状況を伝えようと思ったのだ。しかし考えてみると、新聞では大躍進の情勢がますます好調だとされていたから、私のような右派の人間が、どんなことを言ったとしても誰が信じるものか。政策への中傷だと思われる。だから書いては捨て、死人を見てまた書いた。党中央に上書しよう、毛沢東に伝えようという気持ちは変わらなかった。」

行政は食糧の配給を少なくしただけでなく、飢餓を救おうともせず、さらに農民の食糧を奪取した。向承鑑は次のように述べている。

「当時、倉庫に食糧がなかったわけではなく、その食糧を動かさなかったのだ。なぜ動かさなかったのか。農民の餓死は爆発的に広がっていたのに、上層部は見ても目に入らなかったのだ。上層部は、農民には食べ物がある、農民は食糧を隠していると言いつづけた。1959年末には、地面を掘り返した。農家の家宅捜査をして、何十年も何代も使った枕を破って、蕎麦とかゴミみたいな枕の中身を調べ、そこら中にぶちまけたのだ。地面には穴を掘り、オンドルにも穴をあけたが、食べ物なんて少しも出てこない。幹部たちは、ホントは農家に食糧はないと知っていたんだ。そういう話は、各部署で隠して上層部には伝わらなかった。」

上層部が農民の餓死を放置したのは、幹部の自己中心的な出世欲と虚栄心による腐敗があるとともに、毛沢東の政策に対して瑕疵を生じさせた場合、自分の出世や安定に危機が生じるという恐怖があった。向承鑑は次のように述べている。

「59年末には既に極めてひどい餓死の現象が発生していた。武山県の第1書記は張十存といい、第2書記は張克仁というが、彼らは、餓死者が相当ひどかったのに、武山の新寺公社で食品展示会を開いた」

地方党幹部は、みずからの出世と保身のために農民を犠牲にし、餓死者が出ていることを公けにさせないためには手段を選ばなかった。「星火」のメンバーで、名誉回復後に蘭州大学教授となった江献国は、本作のインタビューで次のように述べている。

「当時、甘粛省では張仲良から命令が下った。凡そ北京への手紙、つまり国務省・党中央・毛主席あての手紙は、一律すべて検閲せよ。手紙内で餓死者だとか食べるものがないと言及していたら、その手紙を書いた者を投獄せよと。噂では1000人以上が投獄されたという」

この張仲良について、向承鑑はこう述べている。

「張仲良というのは甘粛省の第一書記だ。彭徳懐を批判した第八回八中全会で、中央委員候補の最後尾まで昇った、最後尾の中央委員候補だ。はっきり覚えている。出世したんだ」

その結果、甘粛省では農民暴動が発生し、公安が実力行使をして、死傷者が多数出た。

「武山から西へ隴西と武山の間に、鴛鴦鎮という所がある。ここでいわゆる農民暴動が起こった。どういう暴動かという、倉庫を襲って食糧を盗ったんだ。ドヤドヤドヤと捕まった後、パンパンパンと何人も撃ち殺された」

このような事件における具体的な被害者やその数、死傷者が出た直接の責任、死傷者とその家族に対する保障の有無などは、本作では言及されていない。

そして、このような状況が甘粛一省だけではないという認識は、それほど早くから得られたわけではなかったようである。向承鑑は次のように述べている。

「1959年10月に機会があって、出張することになった。北京に菌種を買いに行ったのだ。帰りに天津・保定・石家荘・邯鄲・鄭州・風陵渡などにまわって途中下車した。西安でも降りてみた。駅は各地の窓口だ。逃散した者・親戚に頼る者・食糧を探す者・子連れのもの、こういう人ばかりだった。これは、甘粛一省の問題ではなかったのだ。それで私はこういう結

論に至った。餓死者は全く政策がもたらしたものだ、中共中央・毛沢東がもたらしたものだ。そういう結論に至った。多くの地方の状況を知った。広東・広西・雲南・貴州だ。四川だけはわからなかったが、安徽・河南は甘粛と同じくひどかった。太原で兄と議論になった。地方の現状を兄に話した。兄は私が事を起こさないかと心配し、こう言った。太原を見てみる、ビルが建っているだろう。党の指導でこんな偉大な成果を得た。おまえにはそれが見えないのかと。兄に言った、僕の間を見てよ、目は光っているでしょ？兄さんが見える物は僕も見える。でも僕に見える物は兄さんには見えない。それが僕たちの違いだと。太原から戻った時にはもう、真理に殉じようと腹に決めていた。それしかない決めていたんだ」

この話によると、向承鑑の兄は太原に居住しており、農村の餓死現象について全く認識していないことがわかる。そして向承鑑は、大飢饉が全国レベルのものだという認識を得たからこそ、その原因が党中央の政策にあり、毛沢東にあると確信するに至ったわけである。

### 「星火」印刷の目的

「星火」の印刷はリスクが高いということは認識されていたようである。彼らは印刷について、当時、「鳴放」で民主を叫んだ北京大学の運動に関わった林昭に相談したようである。これについて譚蟬雪はこう述べている。

「林昭は初め「星火」の刊行に賛成ではなかった。それには2つの理由があった。まず、秘密でこれを印刷すると、執筆者と印刷者に危険だけでなく、読者にも同じく危険だ。それにもう1つ、これを印刷した後、人に何を与えられるのか？こんなリスクを払う価値があるのか？誰もが知っている話を書くなら、わざわざ書くまでもない。しかし、林昭はこうも言った。考え方を交換して、影響をひろげて団結しあうために、特に、分散して自由に行動できない状況では、「星火」は啓蒙に欠くべからざるものだ、と。」

「星火」のメンバーもこのような考えを共有したらしく、譚蟬雪はこう述べている。

「「星火」を本格的に話し合ったのは、北海道旅館だった。あれが正式な会議だった。張春元・顧雁・胡曉愚・苗慶久、孫和がいたかは覚えていない。彼らはそこで幾つか正式に話し合った。まず刊行物を出すべきか。当時、みんなの意見は同じで、出すべしだった。刊行物は意見交換と認識の統一という作用が目的だった。だから必要性が非常に高いと思った。定

期か不定期かは、とりあえず不定期で様子を見る。この会議は重要な第一歩だった。しかも決定的な第一歩だ。会議が終わってから、各自執筆に入った。張春元はとっくに腹案があった。散会した後、張春元・胡曉愚・顧雁は別々に執筆しはじめた。」

つまり、彼らは目前の大飢饉と餓死者の状況がなぜ生じているのか、その原因となっている政策の問題点はどこにあるのかを探索するために、各自論文を持ち寄って交換し、相互に参考にしようとしたようである。それは反右派・大躍進・人民公社といった政治運動の渦中にありながら、極めて主体的で理智的な姿勢を示しており、驚嘆に値する。

まず反右派運動について、「星火」第1号「現在の形勢と我々の任務」で向承鑑はこう指摘している。

「中国史において整風と反右派は、重大な意義がある。それは党の変質点、人民を敵とする方向への転回点、ヒューマニズムを敵とする道への転回点だ。」

彼らは自身が反右派の被害者であったが、このような向承鑑の認識は、知識人として自身が受けた反右派運動の経験によるだけではなかった。彼らは農村・農民という立ち位置から反右派運動を再解釈している。「星火」第1号「農民と農奴と奴隸」で張春元はこう指摘している。

「いま農村でいわゆる反右傾運動が進んでいるが、これは農民に同情した者を痛めつけるものだ。やられるのは現場の基層幹部である。彼らは農民家庭出身か、自身が農民で、農民と親和的な関係にあり、多くは農村の党員である。」

農村・農民の立ち位置から見たとき、農村における反右傾運動は、農民大衆の主体性を挫き、人民公社の導入の地ならしになったという認識が得られた。向承鑑は「現在の形勢と我々の任務」でこう指摘する。

「反右派運動後の「反浪費反保守」「交心」「抜白旗」などの諸政治運動は、全て反右派の続きである。こうした諸運動は、全国の人々の精神を徹底的に変革した。人民公社運動は、整風・反右派の必然的産物である。統治者は人民をならし服従させようと、人々の物質的精神的な全てに対して徹底的な剥奪をした。人民を付き従わせようとして、軍事組織的な形によって農民を編成し、奴隸式の集団労働を実行した。」



「反浪費反保守」は1958年2月に始まった、浪費や保守的態度を大字報などによって相互に摘発する運動である。「交心」は、自身の内心の非社会主義的思想を告白させる運動で、1958年3月から7月にかけておこなわれた<sup>8</sup>。「抜白旗」は、1957年5月から始まった、右傾思想を批判して新たな技術革新を出すよう求めた運動である<sup>9</sup>。これらによって、農村には新たな階級が登場する事態となった。「星火」第1号「農民と農奴と奴隸」で張春元はこう指摘する。

「いま農村の大きな変化の一つは、農民の貧困と破産である。農村には新しい階層が出現している—農村プロレタリアだ。この階層の出現は、現今の統治者が実行した極めて反動的な各種の農業政策とその結果である。まず、農業集団化というスローガンの下、残酷にも農民の生産材を、つまり土地・家畜・農具などを間接的に制限し、穀物や油や綿花など農民の生産所得に対して、あらゆる手で略奪を加える。特に人民公社以後、農民のプロレタリア化が大きく加速された。このいわゆる「共産主義への橋」の背後で、広い範囲の農民を国家の奴隸・農奴にさせたのである。」

これは共産党の独裁の発展が、主観性と迷信によって悪しき方向に変質したためである。「現在の形勢と我々の任務」でこう指摘する。

「現在の統治者は何回かの運動において、一つの基本的な指導思想と方法を持っている。主観的臆測を事実優先にさせることと法制がないことだ。それは罪なき人々の心と肉体に大きな傷を与え、計り知れない命を冤罪の死霊に変えた。国家権力と思想的専政によるのは、実は党の絶対的指導の悪しき発展である。真のマルクス主義という看板を掲げたある人物および少数の政治家たちの思想と方法は、日増しに主観的迷信と反動へと変質し、もはや悲しむべき結果を来した」

このように目前の大飢饉と餓死者の状況の原因を考察し、それについてメンバーで意見交換しようとしたという。しかし、「星火」の内容にはそれ以外にも、餓死現象についての言及がある。これは、楊継繩の書物ほか出版されて、大飢饉の具体的な状況が報告されている現状においては、すでによく知られている事柄ではあるが、同時代にこの現象を記録したことは重要であり、その勇気は称賛に値する。例えば、「星火」第2号「ある歌から」で楊賢勇はこう指摘している。

<sup>8</sup> 倪春納「交心運動与反右運動弁析」『中南大学学报（社会科学版）』第18卷第2期、2012年4月。

<sup>9</sup> 王軍「“插红旗、拔白旗”运动始末及评价」『党史研究与教学』2002年第5期。

「私は見た、農民のやせ衰えた姿を、栄養失調によって水腫を発している姿を。道ばた・木の下・畑の中、至るところ死体だ。多くの家庭で食糧が欠乏し、家族全員が死滅した。毎年、政府の公報は、食糧の大躍進・大增産・大豊作、生活は大改善と言う。これはホントなのか？」

向承鑑は「星火」で「食母記」という文を書き、実際に起こった食人事件を記録・紹介しようとしたという。

「私も「母親を食べるの記」を書いてあった。事実にもとづいて書いたんだ。ある子供が母親を食べてしまった。1日に少しずつ食べて、頭部だけが残り、子供は逃亡した。後に捕まって銃殺されてしまった。この事件にもとづいて書いたんだ」

こうした餓死現象の記録は、甘粛省の農村の現場でおこっていることを広く知らせたい、そして党上層部の有為の人士に伝えたいという希望がこめられていたのであろう。苗慶久はインタビューでこう語っている。

「それは私たちがこの目で見た事実だった。それが、ソ連の借金返済のせいにされていた。自然災害だとも言われた。百年に一度の災害だと言うが、実は人災だったのだ。全ての地方幹部がウソを言って人々を騙していた。私たちが書いた人民公社のこと、彭徳懐は正しいということ、全て農村の事実に基づいて書いた。皆に真相を知ってもらうためだった。」

向承鑑の「全国の人民に告げる手紙」にもそれが濃厚に表れている。

「全国の兄弟姉妹・同胞のみなさん、みなさん見たことでしょう。山にも野にも、大通りにも路地にも駅にも戸口にも、ボロボロ衣装で四肢が突っ張り目玉が飛び出て、口をあけた老若男女の無残な姿を。すでにそれを目にしてきた我々は、全てがわかりました。これは中国の歴史で、そして世界の歴史でもかつてなかった、人間性に対する冒瀆である。2億人が飢えて死にそうな時に、人民のために誠心誠意服務するはずの畜生どもは、商店の裏でいかなる品物でも手に入れることができる。お菓子でも飴でもタバコでも。いつでも盛大な宴会を開ける。宴会では5000人の農民が働いた物を消費するのだ。要するに、彼らは変身した。骨の髄まで変わり果てた。1957年以降、官僚統治グループを形成したのだ。彼らは人民にとって旦那様となったのだ。」

それゆえ、「星火」は当初から人々に共産党の専政への反対を呼びかける側面を持つことになった。「星火」発刊の言葉「幻想を捨てて戦いに備えよ」で顧雁はこう書いている。

「目覚めの時だ。もし君が将来の幸せのためにベルトを締め直したのなら、もし君が全人民の豊かさのために戦ったのなら、もし君が仕事を完遂せんと励んだのなら、今日この日こそ目覚めるべきだ。ベルトを締め直した結果は、食糧のさらなる減少、日々の戦いの結果は、社会全体の緊張、仕事に励んだ結果は、冷酷非情な闘争と打撃。なぜかつては進歩的だった共産党が執政十年足らずで、かくも腐敗・反動に変わり果てたのか。それは、偶像崇拜で民主を圧迫したからであり、中央集権のファシズム的統治を形成した結果である。指導者の思い上がりと馬を鹿と為す転倒、ひたすら逆行した結果である。このような独裁統治にしてまだ社会主義と言い張るのなら、独断専行の国家社会主義に他ならず、ナチスの国家社会主義と同類に属する。いま全人民は厳しい任務に直面している。反右派の高潮に続いて、1957年より大きなうねりが来ようとしている。すでに目覚めた同志たちは、民主社会主義と科学的社会主義という共同の目標のもと、団結し機を逸さず大衆を覚醒させ、目前の強権を徹底的に粉砕すべく奮闘させてくれるであろう。」

そして、当初からリスクが高いことを承知していた彼らではあったが、餓死現象の全国的な展開やその背後の幹部の腐敗、政治的な原因などを認識すればするほど、現実的な改善のためにみずからを捨て石にする覚悟を固めていったようである。譚蟬雪のインタビューによると、リーダー格の張春元は、当初に林昭と話したのとは違って、「星火」を公開することを決意したようである。

「後に張春元が提案した。当局の上層部に印刷・配布すべきだと。北京・上海・広州・武漢、それに西安の5都市があがった。」

この企図を実現しないうちにメンバーは逮捕されたのであった。この状況では、農民暴動がいよいよ頻発する、国家的な危機的状況であることを彼らは認識していた。その改善には、幹部や党員に現実の状況を知らせ、政策の誤りであることを認識させて、政変を作り出すしかないと考えたようである。彼らは最後まで、幹部・党員には少なからず民主的な人士がいること、彼らが自浄作用をもっていること、それによって共産党が民主的な方向に変わりうることを信じていたのである。向承鑑は、裁判で次のように発言したことが、その場の人々に影響を与えたと述べている。

「私の周囲を、武器は持っていないが、6・7人の屈強な男が囲んでいた。武装警察が弓形にずらり並んでいたが、私はしゃべっているうちに激昂し、立ち上がって連中を指さして罵倒した。「お前らそれでも人間か？農村の状況を知っているか？眼も見えるし耳も聞こえるだろう。たとえ眼が見えず耳が聞こえないとしても、鼻があれば、どこもかしこも死臭がするのはわかるだろう。少しでも人間性があれば、たまらないはずだ。お前ら人間か？いや違う。お前ら人間じゃない。お前らは共産党員でないだけでなく、人ですらない。畜生以下だ」。罵倒するにつれてさらに激昂した。裁判は私にとって戦場と同じだった。思いの丈を全てしゃべった。まったく、はばかる物なした。本当に何の遠慮もなかった。その時わかった。自分の話に嘘偽りは無い、真実だと。時には彼らの心も動いた。その影響はかなりだったと思う。」

#### 胡傑監督と「星火」—まとめにかえて

前述のように、「星火事件」は現地を除いて、中国ではほとんど知られていなかったのに、これを胡傑監督はどうして扱うことになったのだろうか。胡傑監督は、前作『寻找林昭的靈魂(林昭の魂を探して)』(1999～2005年)において、北京大學学生で、1957年の反右派運動で右派分子とされた林昭の事跡を追った。この時、譚蟬雪や顧雁に対してインタビューをしている。胡傑監督は、林昭についてドキュメンタリーを撮り始めたことによって、中国現代史に関心を持ち始めたと言っている<sup>10</sup>。したがって、林昭について調査を進めるプロセスで、彼女と密接な関係にあった「星火」を認識し、そのメンバーを取材したのだと思われる。林昭と「星火」の関係は、林昭に対する「上海市静安区人民検察院起訴書」(1965年7月)にも言及されている。「星火」が学生や一般の青年によって書かれ、しかも現実に対して強烈かつ鋭い批判と指摘をしていることが罪状を大きくしたと林昭はコメントしている<sup>11</sup>。

2010年、譚蟬雪が自伝を発表したが、この本は普及していない<sup>12</sup>。胡傑監督は、さらに独自の調査とインタビューを重ねて、この事件のドキュメンタリー化を果たした。本作によって、従来の歴史には採り上げられなかった事件について考察する端緒が提供されたと言える。

※本稿は平成26年度専修大学研究助成「アジアにおけるドキュメンタリーの可能性」の研究  
成果の一部である。

<sup>10</sup> 土屋昌明「中国の「民間ドキュメンタリー」とはなにか—胡傑監督へのインタビュー」『専修大学社会科学研究所月報』598号、2013年4月20日。

<sup>11</sup> 『林昭文抄』(甘粹氏2000年7月11日抄本)。宋永毅編前掲書による。

<sup>12</sup> 譚蟬雪『求索——蘭州大學右派「反革命集團」紀實』香港天馬出版社、2010年。本書には『星火』登載論文の全文が紹介されているほか、向承鑑の日記も抄出されており、資料価値が高い。